

海外における日本語教師ネットワーク — 勉強会と Mailing List の効果的な活用 —

西谷 まり

要旨

海外で日本語教育に携わる日本語教師の数は非常に多い。しかし、日本から派遣される多くの教師は、教授経験、日本語教育に関する知識が一様ではないうえに、任期が2年程度という短い期間で人が入れ替わっていく。同じ土地にいる日本人教師同士、所属機関の現地人教師との連携が図られていない場合も多い。そのため、個々人が積み上げた経験や知識の共有、及び継承がなされにくい。筆者は2000年3月から約5ヶ月間、中国吉林省長春市に赴任し、日本語教育に携わった。長春市における日本人、中国人日本語教師の実態調査をふまえて、長春日本語教師勉強会をたちあげ、帰国後はMailing Listを開設し管理者を務めてきた。本稿では、長春日本語教師勉強会とMailing Listの利用状況等について報告し、海外における教師ネットワークのあり方を考える。

キーワード 日本語教師、教師ネットワーク、Mailing List、海外

1. はじめに

筆者は2000年の春から夏にかけて文部科学省（当時文部省）から日本語教師として吉林省の省都・長春市にある東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校（以下、予備学校とよぶ）に派遣されたが、その際に当地において日本語教師会の結成に参加した。帰国後は教師会のMailing Listを立ち上げて管理者を務め、2001年6月には長春日本語教師会の拡大研修会に講師として招かれるなど、教師会の活動に継続的に関与してきた。

予備学校は中国教育部と日本の文部科学省、国際交流基金によるジョイント・プログラムであり、2000年度で21年目を迎えた歴史ある日本語教育機関である。筆者は2000年3月末からの約5ヶ月間、同学校に派遣され、日本語教育に携わった。東京外国語大学留学生日本語教育センターが日本語教育の、東京工業大学が専門教育の基幹校となっており、毎年、日本語教育の専門家及び、理工系を主とした専門科目教官が派遣されている。筆者が派遣された当時、長春市においては東北師範大学外国語学院日本語学部をはじめ、吉林大学、吉林工業大学、白恩求医科大学、長春大学、長春税務学院、吉林語言学院、長春外国語中等等、さまざまなレベルで、さまざまな目的の日本語教育が行われていた。

各教育機関に若干名の日本人教師が在籍していたが、筆者の目には、機関を越えた横のつながりはほとんどない状況に見えた。そのようなことから、海外、特に長春で日本語教

育に携わっている日中の日本語教師の現状を知りたいと考え、調査を行うことを思い立った。

2. 教師調査の結果

調査対象者は、2000年に中国吉林省長春市で日本語を教えていた日本人教師10名に加えて、中国人教師5名、その他には、中国の内蒙古、ベトナム、マレーシア、アメリカ、フランスで日本語教育経験がある日本人教師である。日本人の調査対象者は、長春日本人会の名簿からリストアップし、電話で調査を依頼した。長春市以外の日本人教師、元教師は筆者の知人などにe-mailで調査票を送った。長春市の教師に対しては、調査票に答えてもらった後で、面会して1時間~2時間程度のインタビューを行った。本節では、主に長春市で行った調査の結果について分析する。

長春市の日本人教師は3つのグループに分けられる。第一は青年海外協力隊員として、あるいは、大学や大学院の教員からの紹介で中国へやってきた若者たちで、日本語教育を大学、大学院で専攻、副専攻として学んできた、または民間の日本語教師養成講座を受講した経験のある人々である。第二のグループは日中技能者交流センター¹派遣の60代の人々が主で、日本の仕事を定年退職した後に海外における日本語教育を志した人々であり、日本語教育の経験はないが、中学高校の教師の経験を有している人々である。第三のグループは上記にあてはまらない人々である。中国語を学ぶために留学し、留学期間が終わった後も中国に残り、生活の手段として日本語教師になった人、中国人と結婚した人などさまざまである。第一のグループの人々には日本語・日本語教育に関する知識はあっても経験が乏しく、第二のグループの人々は教育経験・人生経験はあるが、日本語・日本語教育に関する知識は少ない。第三のグループの人々については個人差が大きい。

アンケート、インタビューの結果を以下に述べる。質問項目は稿末の資料1に記した。まず、日々の仕事の忙しさについては、「大変忙しい」「忙しい」という答えがほとんどであった。上記第一のグループに属する20代の女性は「日本語教育経験がなく、初級教育

¹ 日中技能者交流センターは、1986年、日中両国の友好と経済協力を推進するため、労働団体、経済団体、福祉団体などの協力によって設立された財団法人である。応募資格は65才未満で、健康であり「国語もしくは外国語(英語など)の教師資格を有し中学・高校・大学等で10年以上の教職経験をもつ者」または「日本語教育教師資格を有する者または日本語教師養成研修を修了した者で、いずれも3年以上の日本語教育の教職経験をもつ者」とされている。派遣要員は、必ずセンターの「西尾研修所」で日本語教育法を中心とした研修を受ける。研修は2週間ないし3週間合宿で実施しており、講師は国際日本語普及協会の専門家が当たる。この研修を受講しないとその年度は派遣対象にはならない。派遣先は、中国国家教育委員会及び中央省庁設立の大学・学院や地方政府設立の大学・学院など中国全土にわたり、窓口となっているのは中国政府で文教行政を掌る「中国国家外国専門家局」である。ボランティアだが、中国国家外国専門家局との協定で、一月当たり2,200元以上の生活手当と一年間の勤務につき同じく2,200元の休暇手当が支給される。常時100名程度が中国で教鞭をとっている。

(<http://www.jcsec.or.jp/>)

から始めたが、週50分授業が10コマで、全部違うことをしなければならぬので、準備に追われて余裕がない」と述べている。しかし、忙しくてもおもしろいと感じている人々が多い。給料については「安い」と考えている人が多いが、日本円に換算すると2万～3万円程度の月収では、そう考えるのも無理はないだろう。海外青年協力隊員²や日中技能者交流センター派遣の人々はボランティアであるし、宿舍と日本との往復渡航費用が提供され、現地では物価も外食費も安い状況を見ると、暮らしにくいほどではない。しかし、自費で渡航費用をまかなわなければならない場合は大きく違って来るだろう。往復の飛行機代に月給の数か月分を必要とするからである。

また、日々の授業に関わることで「コピーは前日までに事務所に頼まなければならないが、当日にやっと教材が用意できることが多いので、自費で払っていることが多々ある。事務所に頼む場合もありコピーの枚数が多いといやな顔もされる」といった問題もある。筆者がこの数年間継続的に関わっているベトナムの大手日本語学校³でも、コピーは専門の事務員に依頼するのが原則であり、当日では受け付けてもらえないし、ページ番号がごちゃごちゃになって出てきたりすることもあり、フラストレーションがたまりやすい。

「ひとクラスの学生数が多い」ことも負担である。大学では多くても30名程度までであるが、中等教育の現場では、クラスの生徒数が60名、70名というのがごく普通のことであり、クラスコントロールが難しい。中等教育の現場には若い教師が派遣されることが多い。日本語教育にも学級経営にも初心者日本語教師にとっては乗り越えなければならない問題が山積しているといえよう。大学の専攻が日本語だった20代の女性は「大学卒業後に今の仕事を紹介されたが、社会経験もなく、日本語を教えるのも初めてなので、不安で大変だった。やめようかと思ったこともあるが、ここでやめては何事も続かないだろうと思ってがんばった」と述懐している。不安は、現在の教育現場だけではない。若い教師の多くは帰国後も日本語教師の仕事を続けたいと考えているが、調査結果から見ると、帰国後日本語教師の仕事を続けることについては、あまり明るい展望が持てない人が多い。

さらに、中国で日本語を教える際に難しいこととして、「勉強する機会がない」「参考図書が閲覧しにくい」ことを挙げた人が複数いる。中国生活が5年ほどになる男性からも「最初は余裕がなかったが、今は日本語教育、特に中上級に関する勉強会があったら、参加したいと思う。自分から旗を振るのは苦手だが」という意見が出されている。この男性は日本で民間の日本語教師養成講座に通った経歴をもっている。

² 海外青年協力隊員のなかには「自分では仕事だと思っているが、学校側はお金を払わなくてもいい教師と考えているようだ」と感じている場合があった。

³ 筆者は1998年に6週間、1999年に3週間、2001年に2週間の3度にわたってベトナムのホーチミン市にある東遊日本語学校において、日本語教育及び、日本語教師教育に携わった。東遊日本語学校はベトナム最大の民間日本語教育機関である。企業に依頼された日本語研修、日本留学のための研修など多彩なコースをもっており、全校生徒2500名程度という。

3. 長春日本語教師会のたちあげ

調査の結果、日本人教師たちは日本語教育の知識や経験の不足を感じていること、同じ長春市にいても日本人教師同士が日本語教育に関する情報を交換しあう場がないことがわかった。中国人教師との連携はほとんどないという状況で、「中国人と連携して何かやることは難しい」と感じている人が多い。中国の大学の教師は(少なくとも長春市の大学では)、日本語教育担当に限らず、大学に研究室を持っていないので、基本的に自分の授業がある時だけしか大学にいない。そのため、日常的に授業について話をするような機会をもつことが難しい。

「日本人先生とペアを組むことは、言葉の使いわけの微妙な部分などいろいろ教えてもらえて役に立つ」という中国人教師の意見に代表されるように、日本人教師の母語話者としての役割を積極的に評価する教師もいるが、日本人教師には視聴覚、日本事情、会話のみを担当させ、お互いの連携がほとんどない機関も多い。筆者が関わっているベトナムの学校では、ベトナム人教師は教師経験が豊富な一方、日本人教師は日本語教育経験の浅い若者が多かったが、ベテランのベトナム人教師の中には、日本人教師はテープのかわりに生の日本語を話してくれればいいという考えも見られた。

そこで、筆者は2つの提案を行った。1つは相互の授業参観を行って中国人教師と日本人教師の連携を進めること、もう1つは定期的な勉強会を継続的に行うことである。まず、予備学校において、公開授業⁴と討論会を実施した。筆者の初級特別授業を予備学校及び、東北師範大学の敷地にある吉林語言学院の日本人、中国人教師に公開した。参加者のなかから東北師範大学の非常勤講師(吉林工業大学の専任教師)が2名、その後も継続的に筆者の授業を見学を訪れた。勉強会は第一回を2000年7月に行った。場所は予備学校の外国人教師の宿舎、出席者は8名であった。この時の参加者は日本人教師のみで、若い教師4名、定年退職後に中国に赴任した元高校教師3名及び筆者である。筆者の授業ビデオを見ながら、それぞれの授業について振り返った。1ヶ月に1回発表を中心とする勉強会を持つこと、中国人教師とのリンクを強くすることが話し合われた。第二回は8月末に行われ、10名の参加者のうち、4名が中国人若手教師であった。東北師範大学の日本人教師と筆者が作文教育とディベート教育について発表し、討論を行った。この時に筆者の帰国後に Mailing list (ML とも呼ぶ) の登録手続きをすることが決まった。勉強会は2002年3月末現在で14回を数えている。詳細については資料2を参照されたい。

⁴ 予備学校の教室を利用して、初級後半の文法項目「ても」を題材とする45分程度の授業を行った。導入部分は既に終わっているものとして、主に口頭練習を行った。対象学生は筆者が予備学校で担当していた18名の学生である。筆者の初級公開授業のあと、筆者と同時期に予備学校に派遣されていた日本人教師2名が、中級の教え方について発表を行い、その後、初級授業とあわせて討論会を実施した。

4. 拡大研修会

2001年6月には月に1度開かれている勉強会の集大成とその後の勉強会への起爆剤とするべく、3日間に及ぶ拡大研修会を行った。長春市内の大学、中等教育機関及び、Mailing listで広報活動を行い、約60名の参加者が集まった。参加者の半数以上が中国人教師で、日本人教師のなかには、大連、瀋陽、延吉等から列車で4時間、8時間かけて参加した青年海外協力隊員の姿も見られた。研修会は東北師範大学外国語学院日本語学部の教室において行われた。

主催は長春日本語教師勉強会で、国際交流基金北京事務所から助成金を得ることができた。研究会を計画した当初、国際交流基金のネットワーク助成金への応募を考えた。しかし、この助成金は長春市のような狭いエリアではなく、国全体といった広域のネットワーク事業を対象としたものであり、今回の規模の勉強会では助成の対象にはなりにくいという指摘を受けたため、中国北京事務所の助成を申請し、少額ではあるが助成金を得ることができた。

表1 長春日本語教師研修会プログラム

日時	内容	発表者
6月15日 (金) 午後	中国の日本語教育事情 —これから現場に求められること—	篠崎節子 (国際交流基金北京事務所)
6月16日 (土) 午前	ディベートを通じた口頭表現の指導法 「自転車は自動車より便利である」 「飲酒に制限を課すべきである」	西谷まり (一橋大学留学生センター)
6月16日 (土) 午後	実践報告「初級の指導」 実践報告「中級の指導」 機能と進め方を重視した会話指導	関水水 (東北師範大学) 金英淑 (予備学校) 和栗雅子 (国際交流基金専門家)
6月17日 (日) 午前	聴解の過程を考える —聞いてわかるとは—	小林典子 (筑波大学留学生センター)

研修会の成功は事務局を担った教師たちの入念な準備に負うところが多い。会場の手配、配布資料の準備、事前の宣伝等は行き届いたものであった。研修会終了後、Mailing listに以下の文章が流れた。

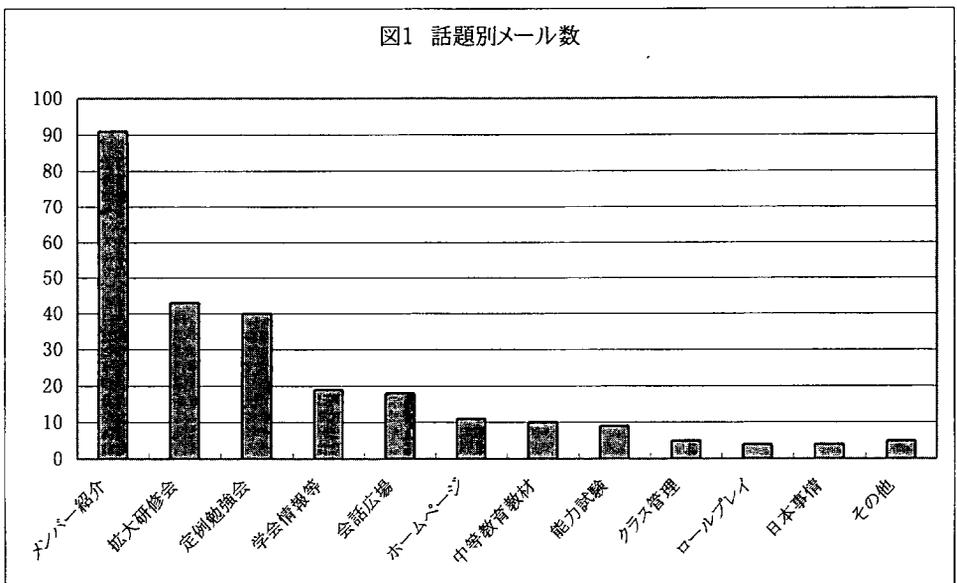
「先日の研修会には長春で日本語を教えている方ばかりでなく、延吉や瀋陽、大連など各地で日本語教師をされている方々もお集まりになり、その熱意というか、熱いものに感動しました。それに、多数の中国の先生方もお越しになり、お互い交流できたことも嬉しく思いました。外国語を自国人に教えることも、自国語を外国人に教えることも考えてみれば、これってけっこう大変なことなんですよ。当然不安や悩みも出てくる

し、慣れない期間は特に大変だと思います。日本語を教え始めてまもなく2年になりますが、試行錯誤の繰り返しです。普段の勉強会で、実践報告を通して別の人の授業方法を知ることは本当に勉強になりますし、授業の中での悩みなど話し合っ、一緒に解決策をはかったりできたらと思っています。また、メーリングリストを通じて遠くにお住まいの方々ともいろいろ情報交換したり、相談しあったりすることもできます。これって、本当にスゴイことですよ。そして、たまには、こんな研修会があって、みんな顔を合わせられて、そして本格的に日本語教育について勉強できるのも、素晴らしいことです。長春の方は勉強会で会いましょう。遠くにお住まいの方はメールで会いましょう。」

5. Mailing List の利用の実態

2000年9月に筆者が管理者となり Mailing List を立ち上げた。2001年3月7日までに258通のメールが配信されている。登録メンバーは56名で、日本にいるメンバーは15名、中国人教師が6名、その他は中国、主に長春市において日本語教育に携わる日本人教師である。

メールの内容は、新メンバーの登録、自己紹介関係が92通、勉強会、拡大研修会のお知らせ報告関係が40数通ずつで最も多く、次に日本で行われた学会などの情報、会話広場、ロールプレイ、漢字教育、日本事情、能力試験、クラス管理、中等教育向けのテキスト作成、自学卒業といったトピックが話しあわれている。



最も盛り上がったのは会話広場についての意見交換である。「留学生に声をかけて『会話広場のようなもの』をやってみようかと思いはじめました。最初から大々的なことはできませんので、私が授業を担当しているクラスの学生とその他興味のある学生とで始めてみようと思っているのですが、全く初めてのことなので、何から始めていいのかわかりません。そこで、『会話広場』をされている先生方がいらっしゃったら、いろいろと聞かせていただけたらと思います。」という問いかけに対して、実際に会話広場を行っているメンバーから、歌を使ったクイズなど、実践的な仕掛けについて情報提供がなされた。会話広場の運営方法、使う素材について経験やアイデアが披露された。例えば「今日は会話広場で、『この後どうなる？クイズ』というのをやってみました。VCDを学生に見てもらい、途中で画像を止め、『さて、この後この人は何をしようか』『この後どうなるでしょうか』などと質問し、予想・想像してもらって、当ててもらうクイズです。必要に応じて、問題や正解を黒板に書きました。今日も賞品を出しました。初めは、何か適当な日本映画やドラマを編集したものを使おうとも考えましたが、準備が大変そうなので、どうしようか悩んでいたのですが、ふと、無声映画を利用することを思いつきました。今回使用したのは、チャップリンの『街の灯』でした。」という発言である。さらに、「歌詞当てクイズ」「なぜなぞ」について実践的内容が紹介された。

中等教育の教科書についても活発な意見が交換された。「中国の中学校の教科書が新しく作成されることになり、私も日本側編集委員として、教科書作成に携わることになりました。作成するからには、現場の意見をどんどん取り入れ、いいものを作りたいと編集委員一同考えております。が、その教科書を使って学ぶ中学生の顔が見えず、それが我々の悩みとなっております。中国で日本語教育に携わっていらっしゃる皆様、お力を貸していただけませんか」という提案を受け、中学生が今興味を持っていることについて発言があった。その過程で、長春の中学で行ったアンケートの結果が紹介された⁵。このことがきっかけとなり、筆者の娘が通学している日本の公立中学と中国の中学の半年間の交流が開始された⁶。

⁵ 対象者：長春市**中学 初級中学1年生（二クラス：計145名）

質問内容：「これからのわたしの授業に望むこと」（中国語可 複数回答可）

回答者数：120

日本事情の紹介：22名（名所旧跡、祝祭日、地震、礼儀作法、民族楽器、宗教、科学技術）、ゲーム：11名（日本らしいゲーム、日本の子供がよくするゲーム）、歌：7名、日本の中学生：5名（どんなことをして遊ぶのか 休みはどのくらいあるのか 授業はどんな感じなのか。）、課外知識：4名（日本人がよく使う言葉、おもしろい言葉、あいさつ用語など）、日本のもの：4名（おもちゃ お菓子など）、アニメ：3名、日本の写真：3名、スター：2名、ものがたり：1名、日本人について：1名、日本の先生：1名、日本と中国の違い：1名、ペット：1名

⁶ 中国の生徒(約350人)に「日本の中学生への質問」「長春市の紹介」という二つの項目について自由に書いてもらった。その際、中国語の使用も可とした。それぞれの回答を集計し、上位のものを日本語に翻訳、整理して、日本の中学校に送った。2年生(約170名)の生徒た

ある時は、クラス管理についての悩みが語られた。「私が今一番困っているのは、小学生が大騒ぎになってしまった時の対処の仕方です。授業中に突然喧嘩が始まったり、ゲーム中に別のチームを罵りあったり、65人もいるので、いつもどこかで何か問題が起ってしまう。相手は小学生ですから、ある程度は仕方ないとしても、授業が成り立たなくなっては困るので、叱らなくてはと思うのですが、どう叱ったらよいのかわからず、途方にくれてしまうこともしばしばです。残念ながら、授業が続けられない状態に陥ることもあります。そんな時、私は一体、どう対応したらいいのでしょうか」という問いかけに対して、高校教師歴数十年のメンバーから「教師というのは、何回も試され、試行錯誤して、前進するものです。最初からそんなに上手く行くものではありません。しかも、異国に来てですから、さらに大変です。やはり原則に返り、焦らずにやるべき事をやることです。即効性は体罰ですが、それは、日本人にはできないことです。また、それは教育ではありません。生徒に迎合しないこと、きちんということは言い、言ったことは貫き通すことです。そして、厳しい面の反面、やさしく包んでやるのが大切です。教育の原点は、優しさと厳しさです。また、影響のある子どもとのコミュニケーションです。何気ないことから言葉を交わし真意を伝え、真意を聞くことです。及び腰、逃げ腰の態度をとると真面目にやろうとする生徒をも遠ざけることになります。また、生徒のレベルをどこに置いて授業を進めるかも重要です。高い方も低い方もかなうようなレベル、気の配り方が必要です。そして、面と向かってどうして授業中騒ぐのかも全体に迫ってみることも必要です。手をかえ品をかえいろいろ試みるのではなく、迎合、妥協することなく、理にかなったことをすすめることです」という助言が寄せられた。それに対して「おっしゃるとおり、初めからうまくいくはずありませんよね。よく考えてみたら、まだ4ヶ月しか経っていませんし、これまで高校生以下の子どもたちを教えたこともなく、ましてや相手が中国人ともなれば、大変なのは当たり前でした。そう思ったら、気持ちが楽になったような気がします。ここ最近、『何とかしなければ』という思いから、小学生の教室に入るときには変に意気込んでいましたから、そのピリピリした雰囲気か余計良くなかったかもしれません。小学校時代、新任の若い先生が来ると、クラスの男の子たちが騒いで、一度、それがあまりにひどいので、ある女性の先生が泣き出してしまったのを思い出します。『子どもたち』を相手にする以上、これは誰もが抱える悩みなのかもしれません。私はまだ泣かされていない分、いいほうですね。(笑)」と、相談者が応答している。

以上のやりとりから、Mailing List は授業で困ったことをお互いに相談し、経験者がそれ

ちに配布し、86人からの回答を得た。その回答と担任の先生からの手紙(学校紹介)、クラスの写真などを筆者が中国出張の折に長春に届けた。中国では日本の中学生の回答を基にプリントを作成、授業時間に配布し、読み合わせ、解説を行った。日本では、第二学年の5つのクラスで長春紹介の写真とビデオ(筆者が赴任中のもの)、長春から届いた手紙を紹介する授業が行われた。最終的に38名の生徒が長春の中学生への手紙を書き、中国に郵送した。

に助言する場、勉強会の情報提供、勉強会後に発表について感想を話し合う場にもなっていることが伺える。しかし、一方、中国人教師の発言はほとんど見られないこと、自己紹介以外には一度も発言がないメンバーも多いことが問題点として指摘できる。

6. Mailing List の効果的活用に向けて

Mailing List は 2000 年 9 月下旬に開設されたが、10 月に以下のようなメールが流れている。

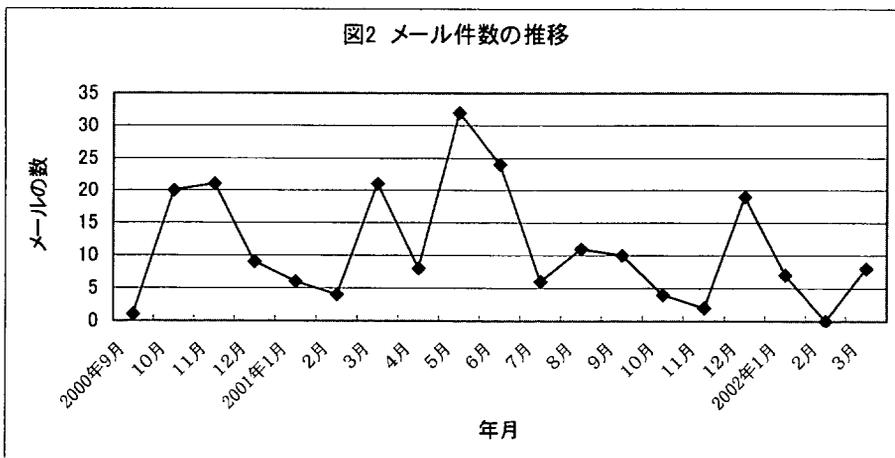
Subject: [changchun2000-ml] 日本の情報に感謝！

「このメーリングリストが始まってから、日本の情報も入るようになり少し日本（の日本語教育界）にいるような気分を味わっています。（幻想ですね・・・知らない先生の名前もあるし・・・やっぱり帰ってから苦労しそうです・・・）

これからも、いろいろな情報、楽しみにしています。」

10 月、11 月には発言の量も多く、内容もバラエティにとんでいたが、春節の休暇が近づきいったんはメールの数が激減する。その後、拡大研修会に向けて内容の相談、事前準備、国際交流基金北京事務所スタッフとのやりとりなどで、メールの回数が増えていく。しかし、6 月の研修会の後は、定例勉強会のお知らせと報告、新しいメンバーの自己紹介がほとんどとなり、議論、情報提供は大変少なくなっている。

発言者は ML の管理者である筆者が最も多く、次いで勉強会の幹事となっている。中国人教師の発言は、ほぼ自己紹介のみである。2001 年夏には長春に滞在中の日本人教師の手によってホームページが開設され⁷、勉強会の報告、役に立つリンクなど豊富な情報が提供されるようになった。



⁷ <http://isweb39.infoseek.co.jp/school/jilin/>

毎回の勉強会の議事、写真、日本語教育に役立つ教材等のリンク集から構成されている。

2001年3月に勉強会、ML について「役に立っていること」、「改善したほうが良い部分」などについて、ML メンバーに意見を聞いた。「勉強会の定例開催によって、同じ地域の教師といろいろな意見交換できる」、「授業で使えるアイデアがもらえる」、「授業と関係なく交流できる」、というメリットを感じ、ML についても「独り善がりになりがちな海外で、情報収集ができる。日本からの情報も得られる」と評価するメンバーがいる一方、「長春にいる人は顔がわかるが、その他の地域についてはどういう人が参加しているのかわかりづらいので、簡単な参加者のプロフィールがほしい」という指摘があった。2001年1月に一度名簿を公表しているが、ML というメディアの性格上、毎月のようにメンバーが五月雨式に出たり入ったりするために、管理者以外が参加者全員を把握するのは難しい面がある。参加者の顔が見えないために、発言がしにくい状況があるとしたら改善が必要であろう。

ML にどんな情報を期待しているかについては「最新の日本語教育の情報」「日本国内の状況報告」があがっている。空間を越えたメディアとしてのML に期待されているのは、より新しい情報であることが見て取れる。しかし、日本から新しい情報を発信し、中国でそれを受け取って終わりという状況では双方向のコミュニケーションとはなり得ない。池上(2001)は、中国帰国者定着促進センターで開設している「子どもメール」の課題について、やりとりが情報要求と情報提供で単発に終わってしまうことがあることは改善すべき課題であると述べている。佐久間(1999)もインターネットの電子掲示板のような機能を利用した情報や意見の交換の重要性は認めているが、「それは事務連絡の手段とし、ここで提案する勉強会は、やはり参加者が同じテーブルについて」と述べ、顔の見える関係の必要性を指摘している。

しかし、ML を通じて日本とつながっているということは、日本人教師にとっても、中国人教師にとっても意味があるはずだ。日本人教師のうち、若者の多くは帰国後の仕事について不安をもっている。日本における求人情報は現在ではインターネットのホームページでも収集できるが、日本の現場で実際に仕事をしている先輩と直接やりとりできる、ホームページにのらない情報を知ることができるという点は大きい。また、中国人教師にとっても、日本の教育研究現場で現在行われていることについて生の情報が入ってくるという利点がある。

勉強会、ML の意義について、あるメンバーが以下のように語っている。「教師というのは、悪く言えば、教室内のお山の大将になりがちな危険性がある。みなそれぞれに試行錯誤を重ね、よりよき授業を模索していても、時にはそれが独走であったりして問題点に気づかなかつたり、あるいは気付いたとしてもどうすればよいのか分からなかつたり。また、授業を担当するにあたって、自分の知識不足や経験不足から生じる問題に悩むことも少なくない。でも、これは一朝一夕に何とかなるものではなく、また一人で悩んでいるだけでも埒はあかない。日本ならば、職場の上司に相談するとか、同僚と話し合うことも可

能であろうが、場所が外国であるがために、それがどこの学校でも可能とは限らない。そうした状況の下、やはり同じような悩みを抱えている人や、同じような仕事をしていても、自分とはまた異なる経験をもっている人との交流が求められるのではないだろうか。」

筆者が ML の管理者として最も感銘を受けたのは、クラスコントロールに悩む若い教師に対する、学校現場の経験豊富な教師の心のこもった、そして実践に裏付けられたアドバイスと、それを真摯に受け止めて前に向かっていく若い教師のやりとりである。勉強会のように、実践を持ち寄り検討する会では俎上に乗りにくい話題も、ML のような井戸端会議の場にはのせることができる。日本語教育についての知識や経験を共有するだけでなく、人生経験、教師経験を語ってもらうことは若い教師にとっては大きな力になるだろう。

ML を活性化させるためには、管理者を含めたキーパーソンが、ホットな話題を提供し⁸、新しい情報を発信していくことが必要であるが、それだけではうまくいかない。メンバーそれぞれが自分たちの悩みを率直に発言し、他のメンバーがそれを自らの問題として共に考え、解決していこうという雰囲気づくりが必要である。自己開示のしやすい環境を作るために、定期的に参加者の名簿を公開することも必要であろう。

7. おわりに

勉強会を主体としつつ、ML、ホームページといったメディアを補助手段として利用することによって、これまで共有できなかった情報、継承しにくかった知識が蓄えられはじめている。国際交流基金日本語国際センター（2001）によれば、3年前までは教師会といえ、全国レベルの中国日語教学研究会しかなかったが、現在では各省、各市地方レベルの教師会も続出したということである。こういった地域レベルの教師会では、授業に実際に役立つ実践報告と、機関を越えた日中日本語教師の顔の見えるコミュニケーションが一番の目的となるだろう。

今後のネットワークのあり方を考えた場合、やはり中心となるのは対面コミュニケーションの場である定例勉強会であるが、補助的手段としてインターネットは大いに利用できる。長春で日本語教育を経験した日本人教師たちが帰国後も ML のメンバーを継続するケースが増えている。先行者の経験を新しく長春に赴任した教師たちに伝えることは有意義な活動である。

日本人教師の任期は概ね 2 年程度であるため、腰をすえた研究活動を行うことは難しいが、中国人教師及び現地に根を下ろした日本人教師、日本に帰国した元派遣教師が協力し

⁸ この原稿をまとめた後で、これまで話題になったいくつかのトピック「会話広場」「クラス管理」などについて、現在はどうなっているかを聞き、かつ新しい話題として「作文添削無用論（作文を丁寧に添削しても、すぐにゴミ箱行き。先生は真面目にやっているとわかれるだけ）」というものを紹介したところ、1 週間以内に 7 通のメールがとびかった。多くは「実は私もそう思っていた」というものであったが、ゴミ箱に行かせない、実力を伸ばすための実践を紹介するメールが起爆剤となって議論が続いた。

ていけば、中国人に対する日本語教育の研究を行い、教材開発への結びつけていくことも充分可能であろう⁹。第四回の勉強会で「中国における日本語教育の歴史的発展」について発表したメンバーは、「現在の日本語教育研究状況を鑑みると中国語圏の学習者を念頭においた教授法はまだ確立されていない。中国国内の日本語教育の状況も多様化しており、不十分である。中国で日本語教育に携わっている教師たちが、中国における日本語教育という視点から自らの教室活動を一つの基盤として、各分野の日本語教授法を確立する模索が望まれる」と語っている。世界各地に点在している日本語教師がそれぞれ地域的ネットワークを形成し、その国、地域にふさわしい日本語の教育研究を進め、その経験を蓄積していくことは重要な課題である。長春日本語教師会及び Mailing List の今後の展開が期待される。

参考文献

- 池上摩希子(2001)「メーリングリストを利用したネットワーキング」『世界をひらく教育』創友社
- 伊勢田涼子(1997)『海外で教える日本人日本語教師養成についての基礎的研究』平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 国際交流基金日本語国際センター(2001)『国境を越える日本語教育—地球規模でのネットワーク作りをめざして—』国際交流基金日本語国際センター
- 佐久間勝彦(1999)「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題」『世界の日本語教育』日本語教育事情報告編、国際交流基金日本語国際センター
- 長春日本語教師勉強会(2001)『2001年長春日本語教師研修会報告書』長春日本語教師勉強会

【資料】1 日本語教師に対する聞き取り調査

1. 名前 ()
2. 生年月日 (19) 年 () 月
3. 国籍 () 日本語能力試験合格 (級)
現住所 電話番号 Eメールアドレス 日本の住所
4. 性別 (男性・女性)
5. (既婚・未婚)
6. 現在の職場と身分 (常勤・非常勤・ボランティアなど) と担当授業レベルと内容
7. 学歴 (日本語教育に関しても)

⁹ 筆者の所属する一橋大学留学生センターでは、MLのメンバーである東北師範大学の教師の協力を得て、2002年度から中国人学習者に対応した教材開発のための基礎的研究を開始する。

8. 職歴 (日本語教育歴及びその他の職歴)
9. 日本語教師を志望した理由 (きっかけ、時期なども含めて)
10. 現在の状況についてどう感じていますか。
- 1) 給料 非常に高い・高い・普通・安い・非常に安い
 - 2) 仕事内容 大変おもしろい・おもしろい・普通・つまらない・大変つまらない
 - 3) 忙しさ 大変忙しい・忙しい・普通・忙しくない・ひまずがる
 - 4) 学生の質 非常に高い・高い・普通・低い・非常に低い
 - 5) その他
11. 将来も日本語教師を続けたいと思いますか？続けたい方はどこで、どのような形で続けたいか、続けたくない、続けられないと考える方はなぜか理由も教えてください。
- 絶対に続けたい・続けたい・できれば続けたい・あまり続けたくない・続けられない
12. 日本人教師にとって中国で仕事をする際の難しさはどんなことですか。
- 中国人教師にとって日本語を教える際の難しさはどんなことですか。
13. 日本人教師にとって中国で仕事をする際の楽しさ、良い点はどんなことですか。
- 中国人教師にとって日本語を教える際の楽しさ、良い点はどんなことですか。

【資料】2 長春日本語教師勉強会の歩み

年月日	出席者	発表者、所属、内容
第1回 2000年 7月1日	8名 日本人8名	西谷まり(予備学校)「練習の方法」 西谷の授業ビデオを見ながら、練習の際の注意点やポイントを説明、自分たちが授業における問題点を出し討論。勉強会の運営について、1ヶ月に1回発表を中心とする勉強会を持つこと、Mailing listをたちあげること、課題として中国側とのリンクを強くすることが話し合われた。
第2回 8月27日	10名 日本人6名 中国人4名	石河旭(東北師範大学)「作文指導」 西谷まり(予備学校)「ディベート指導」
第3回 10月15日	17名 日本人14名 中国人3名	宋欣(吉林工業大学)「日本語音声文法の構想」 田賀真美子(白求恩医科大学)「能力試験1級対策授業実践」 短期派遣専門家：新しい試験制度「日本留学試験」の紹介
第4回 11月12日	20名 日本人19名 中国人1名	山田花尾里(東北師範大学)「中国における日本語教育の歴史的発展—大学の日本語専門教育について—」 東和枝(予備学校)「日本事情の授業実践—難しすぎる教科書をいかに使うか」

第5回 12月10日	15名 日本人12名 中国人3名	常驕陽(長春大学)「景気低迷のもとにある灰色現象と金ブーム」 小林由生(長春市第一外国語中学)「小中学校における日本語教育」 事務局の開設、参加費(毎回一人2元)の徴収などが決まる。
第6回 2001年 3月11日	15名 日本人14名 中国人1名	木下崇(吉林大学)「学生の作文指導・・・学生との知恵比べ」 西田孝(長春師範学院)「日本語教授法の陥穽」(プリント配布のみ)
第7回 4月8日	10名 日本人9名 中国人1名	芝村康子(吉林大学)「初級後半の会話授業実践報告」 松崎りえ(予備学校)「短期集中コースにおける初級の会話練習」
第8回 5月27日	10名 日本人9名 中国人1名	浜野なな枝(長春外国語学校)「スピーチコンテストの指導実践報告」 東海林健(予備学校)「中級視聴覚の授業実践-ビデオ(教材)のより効果的な使用法」
第9回 8月26日	22名 日本人16名 中国人6名	新メンバー10人を迎えた。教師会メンバー間で自由に教材の貸し借りをできる環境を作るという目的で、教材・及び参考書リスト作りについての説明。次に学習者が誤りやすい類似表現の教え方について1.話し合いが行われる前の月までに、テーマに沿った文献を探してきてコピーしてメンバーに配布する。(事務局が中心となっていく)2.メンバーは次の月までにその資料を各自読んで、勉強してくる。3.翌月に、各自読んできた文献を参考にしたり、それから一歩進めてその文法項目のよりよい教え方について、みんなで話し合う。・会費は一人5元とする
第10回 9月16日	18名 日本人14名 中国人4名	澤田智穂子(長春市十一高校) 授業実践報告「問題点の発見と明確化」 山田花尾里(東北師範大学) 類義表現の教え方 テーマ「ね・よ・よね」
第11回 10月14日	20名 日本人15名 中国人5名	呉尽(華僑外国語学院) 授業実践報告「二年生の日本語文法授業」 山田花尾里(東北師範大学) 類義表現の教え方 「ね・よ・よね」 (前回の続き)
第12回 11月11日	21名 日本人16名 中国人5名	松崎りえ(東北師範大学赴日予備学校) 授業実践報告「テープを使用した初級視聴覚授業」 劉麗華(吉林大学) 類義表現の教え方 「うれしい」「楽しい」

海外における日本語教師ネットワーク

第13回 12月9日	16名 日本人13名 中国人3名	加藤悦子(第八高校) 授業実践報告「聴解・作文授業におけるクラス活動」孫淑平(華橋学院) 類義表現の教え方「大変」「とても」「非常に」
---------------	------------------------	---

注：所属に記載した予備学校は東北師範大学赴日本国予備学校、東北師範大学は東北師範大学外国語学院日本語学部を指す。

『一橋大学留学生センター紀要』正誤表（第5号）

誤 表紙および 77～92 頁 西谷まり「海外における日本語教師ネットワーク
—勉強会と Mailing List の効果的な活用—」が「I 論文」に含まれる

正 表紙および 77～92 頁 西谷まり「海外における日本語教師ネットワーク
—勉強会と Mailing List の効果的な活用—」が「II 報告」に含まれる

誤 表紙 I 論文 河野理恵「ステレオタイプ日本事情教育」

正 表紙 I 論文 河野理恵「ステレオタイプと日本事情教育」

執筆者各位にご迷惑をお掛けしましたこと、深くお詫びし、訂正いたします。

（『一橋大学留学生センター紀要』編集委員会）